

Title	戦争の地理學的考察(二)
Author(s)	小川, [琢]治
Citation	地球 (1929), 11(3): 163-173
Issue Date	1929-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183576
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

地球第十一卷第三號

昭和四年三月一日

戰爭の地理學的考察 (二)

小川 琢治

五

戰爭に及ぼす地理的影響の多大なるは前稿(第一卷第一號)に述べた所により其の一斑を窺ふに足ると信するが、就中直接の關係を有する地理的因子として戰爭の進行を左右する地勢及び地形を考へねばならぬ。此の方面の考察は用兵上の必要から常に兵學家に注意されて、軍事地理學 Military Geography 又は戰略地理學 Strategic G. として頗る廣汎なる範圍に渉る一專科を形成し、國防上の重要から屢國家の軍事機密ともなつてゐる。一九〇一年二月柏林で本邦武官と同宿した際に、巴里で伊國シロニーの佛譯戰略地理學を購ひ得たのに反し、獨逸で少しも同種の專書の見當らぬことを話し、初めて斬新なる獨逸語の軍事地理學の參考書のない消息が知れた。然るに一九一〇年頃から以後に至つてペーテルマン地理學報に戰爭地理學の一欄が特設され、日露戰爭當時の軍事行動に及ぼした氣候の關係などが論究されて、此の方面の研究が兵學家に非ざる地理學者にも之を試むる傾向が起つたことを認めたが今から之を觀れば世界戰爭の將さに爆發せんとする中歐國民の注意が

此の方面に向けられてゐた事情が推知されて面白いのである。

此の如き次第で戦争に關する地理學的考察は主として兵學者の立場から實戰の必要に應ずる程度に於いて研究されてゐるのは寧ろ當然過ぎる位であつて、近來我々の方面から之に論及するものが出て來ても、ブリュス、ワロー兩氏の「歴史地理學」に見えた世界戦争の考察の如き戦争に及ぼす一般の地理的關係以上には立ち入つてゐないのも亦た怪むに足らぬ。軍事の門外漢が濫りに容喙することは大に警戒せねばならぬのはナポレオン第三世の皇后が無理やりに皇帝を戰場に遣つてセダンに普軍の包圍に陥つたといふ話などから明らかであるが、他の一面には軍人以外の政治家及び之をバックする國民が軍事に無理會なる場合には國防に關する施設を怠り又は輕重を誤斷した施設を行ひ、是が爲めに一朝有事の曉に臍を噬むも及ばぬことになり得る。

戦史は戰略地理學以上に軍の行動を計畫する戰略家に必須の智識であるから、専門軍人の手で之を編纂するのは同じく當然であるが、此の方面と雖も歴史である以上は史學研究の方法と態度とを無視して事實の真相を誤解し戦争の目的を曲解し又は成功の徑路を粉飾した記載を敢てすれば、戦慄すべき結果を惹き起して國家の存亡に影響し得るのである。世界戦争の餘程進行した後に獨逸近世史家デルブリュック氏が普國參謀本部で編纂したフリードリヒ大王の戦史に、大王の戦争を起した目的を曲解して殲滅戰 *Vernichtungskrieg* を企圖したとするの誤謬を批評した短篇を読むものをして、キルヘルム第三世の周邊に彌漫した獨逸萬能主義 *Deutschland über alles* の雰圍氣が如何なるものであつて、白佛兩國の占領地に於いて開戦後降服するまでに取つた我々傍觀者からは全く

理會し難い所の辛辣といふか毒胆的といふべきか評語に苦しむ態度の由來する所を察知せしむるに足るものがある。之を換言すれば列強の間に介在したフリードリヒは連衡して當時の弱國普魯西を壓迫する各國軍を撃破して有利なる地位を占め、出來得る限り領土を擴張するに努力したもので、決して敵國を完全に打破して之を併呑するといふまでの意圖はなかつたのに、近時獨逸の隆運に慢心した時代の思潮から之を臆斷して、執る可らざる態度で列國に對する戰爭を開始し初期の成功に酔ふて適當な戰捷を得た處で戈を弭めるといふ深慮がなかつたのである。之をビスマルクとモルトケを左右の手としたキルヘルム第一世のグェルサイユで戴冠式を擧げて引き上げた賢明な態度に比すれば、現廢帝と大小奈翁と同じ運命を辿るに至つたのは當然の歸結と言はねばならぬ。兵驕るものは敗るといふ訓戒の意義が當時の普國軍人に全く理會されてゐなだったので、耳を蔽ふて鈴を盜むの妄舉に出でたのは此のデルブツクの批評に明かである。

戰史の研究に當り主觀的考察が歴史上の事件の真相を臆斷誤解するの危險は此の如く寒心すべきものである。之に比すれば戰爭地理學の方は主觀的要素の遙かに少かるべき筈で、今述べた如き錯誤の起る場合が減多に無いやうに想像され得るのであるが、事實は必しもさうでない。

國境に於ける防備はその地勢に適應せねばならぬことは前稿に述べた如くで、佛國は一八七〇年の戰敗の結果東北國境に於いてストラスブルを中心としたライン左岸の地を失ひ、首都巴里の獨逸軍の侵入に暴露することが以前に比して一層甚だしくなつたのである。その對策として國境の第一防禦線を要塞により嚴守する方針が一時は行はれてゐたのであるが、一九一四年開戦の前數年間

に佛國參謀本部の首腦部は可動性兵力の必要を過重視したのと獨軍が白國及びリュクサンブールの中立を無視して北方から侵入することなしとの想定により、リル、コンデ、モーブーヂュ諸要塞に據つて之を喰ひ留める萬一の場合の用心を缺いたことは、獨逸第一軍をして白國要塞を強襲陥没した勢に乗じて破竹の如く英國上陸軍を蹴破して南下した時に、此等の要塞は毫もその存在の意義を發揮し得なんだ。その結果は北部の佛國に取つて掛けがえのない炭田と工業との隆盛な地方の大部分を敵軍の占領破壊に委ねたのみならず、第一軍にして巴里を目標として進み來らばマルヌ線で怒潮の如き獨軍を喰ひ留めて持久戦に入り得たやも怪しい様な不利の形勢に陥つたのである。

佛軍參謀本部の國防を可動性兵力のみに頼り維持せんとする傾向は野戰戰術の研究に没頭せしめ、砲火の威力の急激の進歩に伴ふ重砲の意義を誤斷せしめたいことも事實である。獨帝が如何に壓迫するも佛國が屈從すると妄斷してサラエボ事件に對する強硬な奥國の要求をバックしたことは、戰爭終熄後出たカウッキ―文書に見えた獨帝と諸大官との間の談話により明かとなつた。而してそのおもな理由は佛國に未だ重砲兵が具備せぬから開戦を敢てし能はぬといふ臆測であつて而かも此の推定が全く正鵠を失つてゐなんだことは、宣戰と同時にアルサスの國境を越えた佛軍が獨逸の防禦線で容易に撃退された事實が裏書してゐる。

佛國參謀本部の首腦者は獨逸の用兵術を研究して一八七〇戰役に於けるモルトケの遣り口に乘すべき破綻あることを看破する炯眼があつてフォッシュ元帥はその研究を實戦に施してマルヌ線に於いて頽勢を危機一發の際に盛り返し、一九一八年獨軍の最終の攻勢に出でんするに當り、機先を制し

て一舉に逆襲の成功を見た譯で、全然その方針を非難することは苛酷であらうが、初期に於ける廟算に缺陷があつた由來も亦た決して看過してはならぬのである。

實戰に於いて輸贏を決する方法處置は専門軍人の技倆と才能に待つ外ないとしても、國防の根本方針、若くは之を遂行するに必要な經費を決定するに當つては、爲政者に十分の理會なく又た國民がその必要を承認し負擔を甘受するに非ざれば、或は無用の國勢を浪費し、或は缺く可らざる施設を阻止することが起り得る。世界戰爭前の佛國軍政當局者は軍需品特に兵器製造會社の傀儡となつたり、野心を懷抱する軍人にして政黨に結託して榮達を圖るものすらあつたとの非難の聲が軍政の中樞に緣遠い將軍中から起つたのは他山の石とすべきである。獨逸第一軍の巴里を顧みずに聯合軍最左翼の英軍を追蹤しつゝ南進するのを察知して、巴里守備軍を提げて不意に獨軍の右翼を横から猛襲する機宜の妙策に成功したガリニエはその一人で、而かもその功績が十分に酬ひられななのは、名利に敏捷な幹部と相容れなんだ爲めであつたかと疑はれる。

此の如き事情に鑑むれば軍政の當局者が平素國民の容喙掣肘するを畏れて國民に軍事の智識の普及するを悦ばぬ如き心理狀態では一朝事ある日に至り積弊が大破綻を起すに至るべきは明瞭掩ふ可らざる所である。

六

シロニー氏は戰爭の技術に二つの主要目的がある、國家の兵力を準備し組織すること、之を使用すること、是なりとし、狹義の戰爭地理學即ち戰略地理學はその第二に關する研究を問題とするも

のであるとした。

兩國が敵對する時にその兵力が互に衝突すべき海陸の地域全部を交戰地域(戰域) Theatre de la guerre(Kriegsschauplatz)と呼び、此の地域は當然兩交戰國 Etats belligérants の領土を包含するも、兩國兵力の衝突により直接の交戰の起る地域はその一部に止るを普通とし、之を區別して作戰地域 Theatre des opérations と呼び、又た之を戰略局面 Echiquier stratégique 又は作戰局面(戰局) Ech. des opérations と呼ぶこともある。作戰地帶 Zone d'opérations と云ふ語も略ぼ同じ意義に用ゐられるが、戰局の大部分を含むから實際同一となるも、その語源は碁盤の局面を意味するエシキエの一行格に相當する一地帶の意味である。

一八七〇、七一年の普佛戰爭の例により之を説明すれば、普佛兩國の全領土は戰域に屬し、普軍の佛國侵入後にロアル河及びリヨン以北一圓が戰局となつたのである。此の頗る廣い局面に於いて普軍は特殊目標に向ひ派遣された結果之に相當する若干の作戰地帶が區別された。此の戰役に於いて普國には陸軍のみで海軍がなかつたから、佛國の沿岸海面は戰域とならなかつたが、佛國海軍は作戰の範圍を普國のバルチック海岸全地帶に延ばし得たのであつた。

シロニーの引いた此の例に比すれば一九一四、一八年の世界戰爭の場合は空前の範圍に廣がり、中歐獨逸兩同盟國がブリガリア、土耳其を引き入れ、聯合國は英佛白伊露セルブ^キア、ルーマニアの外に葡希兩國をも引き入れた結果、歐洲の中立國はスカンナブ^キア、丁抹、和蘭、西班牙、瑞士六國のみとなり、日本北米合衆國英國植民地が參加したので、戰爭は兩半球の海陸面に互つて行はれた。

歐洲に於いては最激戰の行はれた獨白佛國境と露獨境の國境との兩戰域を首とし、バルカン半島の諸國、埃伊國境は何れも戰域となり、メソポタミア、シリア、弗洲獨逸植民地には聯合國の上陸占領する間に大小の戰鬪が行はれ、東亞に於ける膠州灣の占領以後獨逸戰艦の掃盪までに日英海軍の游弋した海面は太平洋西半に亙り、南米西岸及び南大西洋フオーランド島沖の海戰もあつた。英獨兩大海軍は北海を隔て、對峙したのみで、ユートランド沖の一戰すら意外に不徹底な結果に了つたといへ、獨逸潛航艇の跳梁は英國に出入する運送船の脅威となつた如き、前古未聞のエピソードも起つた。故に之を世界戰爭 *Guerre mondiale* (*Weltkrieg*) と呼ぶのが地理的意義を表示するに最も適當である。

更に細目に入るに先ち一言せねばならぬのは戰略學 *Strategy* と戰鬪術 (戰術學) *Tactics* との區別で、戰略は互に離れた位置から出發して戰鬪の起るべき場處に如何に兵力を配置するかを決定する戰爭術で、戰局面に於ける最も有利な地點とその占領により我が兵力の集散を容易にする線とを決定するに在る。敵手に落ちて同様の利益を與へる地點及び線を確保することも亦た勿論である。戰術は戰場に於て如何に行動を指揮するかを決定し、序列正しく各兵種を戰場で動かすに必要な技術である。老モルトケの戰略は戰鬪に導く最善の路を示し、何時何處で戰鬪を開始すべきかを語るものであり、戰術は此の行動中に各兵種を使用する仕方及び如何に闘ふべきかを教へるものである。この言はよく此の區別を説明してゐる。

此の兩者に跨り如何に軍を動かすべきかを指示し、戰略により決定した行動を起して戰場に於け

る適當の位置に就くに必要なる處置を教へる技術は行軍兵站學 *Logistics* と呼ぶことがある。

作戰地域に於いて最初の戰鬪の起るべき邊即ち防禦軍側の最初の抵抗を試むべき線をその戰域の戰略的正面 *Strategic front* と呼ぶ。國境地帶は國家の戰略的正面を成す譯で、對敵軍が各集合して戰鬪開始の命令を待つ時に此の境界線が兩軍をハッキリと分界し、兩者の正面を精密に表示してゐる。然れども作戰が始まると共に此の界線は消失し、兩正面が動いて一方が進み他方が退くことになり、而して兩者を一直線と想像すれば、互の方向及び傾斜が國境に對しても兩者相互の關係に於いても色々になる。

此の色々な方向の違ひ方は戰爭の成行により變化する。之を行動を起した軍に就いていへば、この前面は作戰の前線であつて順次變つて行く。故に作戰正面 *Front d'operations* は攻勢軍の諸縱隊の頭を連ねたに相當し防守軍では一の支持點 *Point d'appui* (*Point of support*) に退却せんとする尾であると言つてもよい。

そこで戰略正面と作戰の正面との兩語は同義と看破し得ることになつて、前者は稍抽象的で寧ろ軍事地理學に適應する意味を含み、後者現實又は假想の行動する軍に關係するものたるの相異なるのみである。故に單な地理に考察して戰略正面と呼んだものは彌々現實又は假想の行動する軍に適用される時には作戰前線(戰線)と呼ぶのである。

一八七〇、七一年戰役に於いてアルサス、ロルレーヌの國境は獨佛兩國に共通の戰略正面であつたのが、兩敵對軍が抗爭を開始するに適する戰鬪序列に即いた時に、この戰略正面は作戰前線とな

つた。

此の如き場合の兩軍の諸軍團が攻勢又は守勢の作戰を開始せんとして國境上で占めた位置の全體を呼んで戰略的戰鬪序列と呼ぶ。戰略上作戰前面に必要とする主もな條件は左の如し。

(一) 作戰正面は一又は若干の重要な障礙物の後ろに展開し、又た兩翼が之に支持されること、
(二) 其の延長は戰時編成をなして之を防禦する兵力に比例すべきこと、之を換言すれば有力なる各部隊が互に相支持し得る様に、即ち互に戰略上良好の關係を成すべきこと、

(三) 作戰正面は退却線をよく掩護し、背後適當の距離に戰鬪に都合よい陣地を有すること。

兩軍の正面は相互の關係上種々の位置を有し得るが、之を大別すれば平行 Parallel や斜行 Oblique の二つとなる。その關係は作戰に少からぬ影響のあるもので、平行正面では迂回運動は困難でもあり、危険でもあるから、防守軍に有利である譯である。但し若し敵軍が散在して敏捷に集合し難い状態に在るならば攻撃軍に大に有利で、迅速に集合して中央を突破する機會がある。

一七九六年伊太利北部戰場に於けるナポレオン第一世の佛軍の塙軍に對する行動はその好例で、兩軍の正面は互に平行してアペニン山脈の南北斜面を占め、奈翁は陽に同盟軍の左翼ボゲッタを攻める様に見せかけて迅速に集團を作つて中央モンテノッテに殺到し、その此處を過ぎた瞬間に同盟軍もサプナにのしかゝつて亦た佛國戰線の中央を突破せんと試みたが、何れも稍時を移したのと兵力の不十分であつた爲めに、兩者共に決定的結果を見なんだ。奈翁は又たミンチオ河上にても同様の作戰を試み、奇襲により占領したペスキエラとゴイトの間のボルゲッタにて河を渡り、ペスキエ

ラ、サロ、ティロールの側から脅嚇してその兩翼を延ばさせた後にその中央を突破した。

作戰正面の斜行する場合には包圍運動を容易ならしめ、敵軍正面の一端を圍んでその固守せんとする點又は之を支持する領土から之を遮斷せんと脅かすことが出来る。是も奈翁の諸戰役及び一八七〇、七一年戰役にその例多く、一八〇〇年伊太利に於けるメラス、一八〇五年ウルムに於けるマック、一八〇六年イエナに於ける普軍、一八七〇、七一年メツに於けるバゼーヌ包圍運動の如き、何れもその明瞭なる實例である。

屈曲する國境の場合には兩交戰國の一方に有利で他方に不利な形狀が戰略正面に影響することがある。その好例は世界戰爭の時の東部戰線で、東普魯西がブキステュラ河を越えて遙かに東に突出する爲め、獨軍の全力を白佛兩國々境の西部戰線に傾注した間に露軍の侵入を被むり、ケーニヒスベルグは脅威を感じた。是は波蘭一帯が奥國ガリシアと東普魯西とに夾まれた不利な正面を成す形勢を好轉せんとした努力で、その初期には頗る成功し、獨軍の大部隊に痛打を與へた事實があつた獨逸の極力秘した爲めその真相は戰爭終結頃までは此の事情は知れなだが、獨逸總司令部は狼狽して一九一四年八月七日リエヂ攻略の殊勳者ルーデンドルフを第七軍と共に東部に廻し、ヒンデンブルグ將軍を指揮官として此の頽勢を恢復せしめたのである。此の一軍を西部から割かなんだならばマルヌ軍に於いて一舉にして獨軍を西部に於ける決定的捷利に導いたかも知れぬと批評するものがある位である。

それは兎に角としてヒンデンブルグ軍は一九一四年八月二十七、九日間の包圍運動に成功し、獨

人の所謂タンネンベルグ戰に全勝したので東部戦場の戦線の形状を一變し、翌年七八月の間にワルソー及びキステュラ、ナレフ兩河上の諸要塞盡く獨軍の手に落ち、爾來時々露軍が盛り返して突進せんと試みても、多くは機先を制せられて撃退されて戦線を失ひ、一九一七年十二月單獨媾和の時には略ぼリガ灣の東岸からガリシアの東邊チェルノキツに引いた一線まで壓迫された。この千餘料に亘る戦線は恐らくは空前の延長を有する正面であつたらう。

丹波に於ける古代人の生活 (三)

藤 田 元 春

一 森林生活

筆者の幼時を追懷すると杉や檜を植林することは桑田地塊の北部、由良川の上流に於てはまだ盛んではなかつた。ことに山の奥の奥である知井村の芦生、佐々里などいふ所は、人跡未到の別天地であつた。一尺からの年魚、同じく鮠アノソウの珍味があり。赤子の泣くやうな聲をだす山椒魚がゐて(重さ三貫目以上)京へ見せ物にうれた、推茸屋が栗や椎をきつて、茸をつくる所だ位を話にきく程の所であつた。従つて材木を切り出すといふのではなく、かの木地屋と稱するものが椀や盆の原料をきつて、木地にして産出する位であつた。木地屋は牧野信之助氏の報告によれば、徳川時代に惟喬